ベストピア Bestopia
第410号
2021年4月号
パリ通信
第112号

# コロナ禍の中で、よいこと発見しましょう

## 1．「クララとお日さま」

### (1)まえおき

3月に世界同時発売されたという「クララとお日さま」を読みました。
テレビでも作者カズオ・イシグロさん（2017年ノーベル文学賞受賞）のインタヴューがあり、ベストセラーになっています。
私にとっては「モモ」（ミヒャエル・エンデ）以来の感動物語でした。語りは夏目漱石の「吾輩は猫である」に似ているところがあると私は感じました。クララは人間でなくAFで、AFの観点から人間を観察するという筋書きは「猫」に通じます。そして、漱石が「猫」の目を通して当時の文明を批評して、近未来を語ったようにクララは「人間の感性」に何かを訴えていると私は思いました。
全体は6部構成の433ページです。第1部に物語の通奏低音があり、各部でそれらが思い出されて語られる、次にどうなるのだろうと興味が増進する巧みな展開となっています。

交流分析を学んでいる人には、文中で繰り広げられる心理ゲームの中にゲーム、又はゲームの中の心理ゲームなども考察できるのではないでしょうか。ミニスクリプトは登場人物にはほぼ全て観察可能だと私は思います。

### (2)AFの意味

アーティフィシャル・フレンド（人工親友）の略語です。今では誰もが知っているような気分になっているAI(Artificial・Intelligence＝人工知能）からの派生語と思われます。
近未来には高所得階級に生まれる子どもは「向上処置」という遺伝子編集がなされて教育も学校での集合教育から在宅授業になっており、側に話し合える友達がいないのでAFを買ってもらい相手をしてもらうようになると想定されています。

（コロナ第4波で大阪市で在宅学習をしようとすると10％の人が家では受信できない環境であることが分かったということ。この少数派には学校で特別の授業がなされるとの対策が考えられています）

AFをペットとの比較は不謹慎ですが、退屈には耐えられない人間にとって無くてはならない存在になりそうです。集団教育がなされなくなると社会性が身に付かないので、地域では「交流会」が定期的巡回的に行われ、母親と子どもが当番の家庭に集い、子どもは子どもの世界で交わり、子どもとしてのルールを作る、親は観察するだけで一切口出しをしないという決まりがある。当番の家庭にいるAFはそれを観察して情報を蓄積していき、主人である子どもの教育に生かしていく、又、母親の手助けをする役割を持っています。

「向上処置」（遺伝子編集がすんでいる）を受けていない子どもはAFを買って貰えないだけでなく、どんなに優秀であっても有名大学には入れない格差社会が描かれている。

## ⑶AFの能力

www.heartot.com ホームページより

AFの使命は「人間を幸せにすること」（いえ、お言葉ですが、奥様、第三世代のAFは世の多くのお子様に大きな幸せをもたらしています。p12)
その為に度重なるバージョン・アップがあり、（今の携帯電話のように）主人公クララはB2型の第四世代です。「クララには独自の美質が数多くありまして、朝中かけても全部は説明しきれません。ですが、何か一つということになると、そうですね、観察と学習への意欲ということになるでしょうか。周囲に見えるものを吸収し、取り込んでいく能力は、飛び抜けています。結果として、当店のどのAFよりーーこれはB3型を含めてですーーどのAFより精緻な理解力をもつまでになりました」(p65)
この時点ではB3型が既にこの店には特別のルートで入荷しているにもかかわらず、クララへの店長さんの評価は高いのです。店長さんの言葉で注意するところは、文章の最後のフレーズで「もつまでになりました」という言葉です。クララはこのお店にきて、慧眼な観察力で成長しているのです。第1部の主なテーマになっています。

AFに感情があるか？誰でも抱く疑問に答えます（ｐ142)
もう一人の主人公の母親がクララに「感情がないって、ときにはすばらしいことだと思う。あなたがうらやましいわ」クララはしばらく考えて「私にも感情があると思います」と答える。p142になって母親がこの会話をすることに、私は行間の深い意味を感じるのですが、クララの鋭敏な感情はp33に登場するコーヒーカップのご婦人の短編に表れており、人は「特別な瞬間には、人は幸せと同時に痛みを感じる」体験をしていのです。人間の複雑な感情を行動や表情を観察して感得するようにAFは成長していきます。ある有名人が「無感動な人間には感謝がないなぁ」と言われたことがありますが、クララは共感と痛みが感じられるAFです。

### ⑷クララの愛と信仰

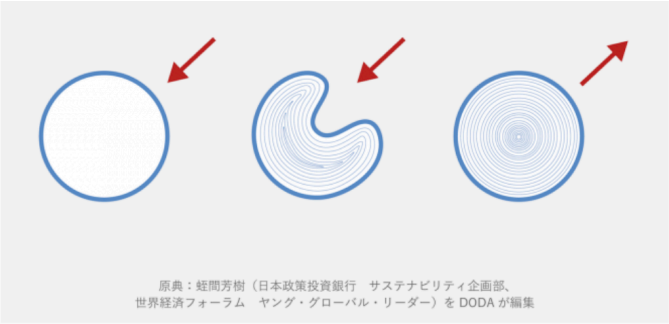
①p43に出てくる「クーティングズ・マシン」と後半に再会するところで人間に対する愛の深さに感動し、私は人間として反省し懺悔します。
②信仰についてはp57に「物乞いの人と犬」の短編に伏線があります。何度かこの話は繰り返し出てきます。①と②から信仰の対象は太陽だとは考えられないところに深さがあります。

### ⑸作者の愛

これについては、もう少し読み込んで、読書会で討論してから発表したいと考えております。

## ２．レジリエンス（resilience）とは、

「回復力」「弾性（しなやかさ）」を意味する英単語です。
「レジリエントな」と形容される人物は、困難な問題、危機的な状況、ストレスといった要素に遭遇しても、すぐに立ち直ることができます。




もともとは物体の弾性を表す言葉ですが、それが心の回復力（精神的な強さの指標の一つ）を説明するものとして使われるようになり、2013年ダボス会議での中心テーマになった言葉だと知りました。
日本交流分析協会の「交流分析の理論と実践講座」・「新型コロナと交流分析」というテーマで神奈川大学保健管理センター長・江花昭一先生のWeb講座で学びました。

> 一般化できない事象と対峙したときのメンタルの置き方（マインドフルネス）や身の振り方（学習して発展する）の総称が、個人のレジリエンスだと私は思います。逆説的ではありますが、ストレスフリーな状況ではレジリエンスを発揮しようがないので、私自身はいかにしてコンフォートゾーンから出るか、理由の分からない刺激をあえて受けに行くかを考えています。そうして、自分自身の思考、五感が何か反応するのを待ちます（蛭間芳樹氏）

コロナ禍でたくさんの情報が飛び交う中で正しい知識を身につけるために今必要なことは何か。それには自我状態のCと自我状態Aを安心させること、そのために４つのRプラスRが必要だとの発想です。
4つのRとはリズム、リラクゼーション、レクリエーション、レスト（休息）です。
＋Rがレジリエンス（resilience）、その内容は上記の原則的な意味を理解した上での心理学的な応用になるのでしょう。
①身体的健康を保つことができる（依存しない）
②楽観的、人を信用できる。自分は大丈夫という自己肯定感
③柔軟な認知、偏見を持たない。「今、ここで」の対応
④能動的対処法、自分が中心になって問題に立ち向かう、自発性
⑤社会的支援ネットワーク

この切り口をどのように生かすかは受講生である我々の主体的な問題ですが、驚いたことはこのレジリエンス（resilience）という能力が、「自我状態Cにある」ということです。自我状態の構造分析を深耕していくと「小教授」という能力が自我状態Cの中にある、即ちCの中のAですが、潜在能力への入口にあるのではないかと私は考えています。
6月から1級の学びに入ります。この当たりの解明も含めて楽しみしているところです。

# ３．日本交流分析協会TA・2級合格しました。

4月20日合格認定書を頂き、1級の申し込み資格を獲得しました。
コロナ禍での学びで東京に通うのも緊張しますが、知識欲はあり、楽しみが広がります。

2級の受験に際して思ったことは
①体力勝負であること。最後の本試験に臨む前の1日半で体力は限界になります。
　気力を振り絞って臨みました。予想問題がかなり当たったので幸運にも回答を見直す時間があり、合格しました。試験直後の合否の感触は「見直しができるか否か」です。
これから各種の試験を受けようとしている人への提言です。
②一夜漬けは出来ないこと。特に暗記しなければならないことは1週間前には完璧にしておかねばならないと痛感しました。私の年になると暗記は若い人には信じられない位の努力が必要です。空で覚えることはできません。録音を聞いても覚えられません。書くことしかありません。書くこと。書くこと。書くこと30回書けば覚えられます。手がしびれる、腱鞘炎になるくらいまで書くことです。
③実は大きな問題はこれからです。
今回の驚きは、書速ということ。設問に回答した文章を起こすのも考えますから時間はかかりますが、その回答を他人が読める文字で書いてみました。びっくりするほど書けません。従って回答を短縮する必要に迫られます。ここでも一工夫が必要です。15分で書ける行数、10分で書ける行数と試みました。この対策が良い結果になったと思います。
実際の試験では予想よりはるかに狭い行数が要求され、他人に読める範囲で文字を小さくして自己の思いを書くことに成功したと考えています。

年を重ねるとすることが増えます。一つ一つの動作が遅くなります。このかけ算的な減力を受け入れながら挑戦するのが、これからの試練であり、できる限り迷惑量を少なくする努力も必要だと実感した受験と結果でした。晴れて6月から１級の授業が受けられることになり喜んでいます。

# ４．「はーとっと」に出会う「みんなだ〜いすき」

4月19日ある方のご縁で「はーとっと」に出会いました。サイトで大発見です。
丁度「クララとお日さま」の感想をまとめていたときでした。サイトから私が感じたことは**「クララのお日さま」**でした。絵本を出版されています。

21日、アマゾンで入手したのが「みんなだ〜いすき」、「しあわせのかくれんぼ」、「こうへいのファミリーコンチェルト」です。絵は「ねもとまこ」さん。お日さまのように暖かい！

「はーとっと」とは「Heart(心）」と「Hot(あたたかい、ホッとする)」をくっつけた、ねもとまことのオリジナルグランドです。
一枚のイラストを目にした時、思わず微笑んでしまうような作品を描きたい。そんな想いから、はーとっとの仲間たちは生まれました。（みんなだ〜いすき」1頁より引用）

間違いなくどの頁を見てもホッとします。ご了解を頂いて「どんな時にもそばにいるよ」
を「クララとお日さま」のところに挿絵させていただきました。

「しあわせのかくれんぼ」は物語になっていて多くのキャラクターがホッとに描かれています。文章は日本語と英語です。英訳も素敵で理解と解釈が広がります。

「こうへいのファミリーコンチェルト」は1999年生まれのピアニストの幼児教育が「感動と感謝」で綴られているホッとな文と絵のコンチェルトになっていると感じました
是非www.heartot.comを覗いて見てください。心が和みます。

パリ通信4月号へ、どうぞ！

# 文化遺産を維持する

パリ通信4月号の概要・続・アジール・フロッタンの再建
パリ通信の筆者古賀順子さんは昨年10月19日再浮上から半年。年末年始2週間の帰省を除き、一日も欠かさず船の監視に通っています。日本とフランスの民間ベースの文化交流の一環として日本側は公益財団法人・国際文化会館が支援しています。現地の通訳や諸活動を支えているのが古賀さんです。建築設計関係の方のみならず広く文化歴史の伝播に関心のある方の協力をお願い致します。詳しくは上記法人のホームページを参照ください。
ノートルダム大聖堂の修復工事も続いています（小原靖夫記）

## パリ通信第112号

4月15日、パリ・ノートルダム大聖堂の火災から丁度2年が過ぎた。夜中遅くまで燃え上がっていた火の粉を覚えている。尖塔の修復のために組んだ工事現場のパイプが焼けただれ、解体に長い時間がかかった。脆くなった窓枠やオジーブには木製の支えが設置され、大きく穴が空いた屋根に覆いがかけられ、聖堂内に新たな足場が組まれた。鉛の屋根が燃えた際に拡散した粉塵が引き起こす鉛中毒対策は、今も工事に大きなブレーキをかけている。大規模で危険を伴う修復工事だが、屋根を支える木組みの樫の木が伐採され始めた。入念に選別された樹齢200-300年の原木を切り出し、これから1-2年乾燥させて、鉛の屋根を支える1300本の木組みを造り直すのである。現代的な塔に建て替える、ガラスやコンクリートを使うなどいくつものプロジェクトが提案されたが、火災前と同じ形に復元されることが決まった。世界中から集まった寄付金で、いくらかかっても修復工事資金に困ることはない。850年を超える歴史を存続させることと資金を天秤にかけることは論外である。

そのノートルダム大聖堂から1,5km上流にある「ルイーズ・カトリーヌ号(別名アジール・フロッタン)」はノートルダム大聖堂のような国宝級の価値はないが、フランスの歴史を物語る文化財である。

昨年10月19日再浮上から半年。年末年始2週間の帰省を除き、一日も欠かさず船の監視に通っている。亀裂からの水漏れをポンプアップし、物が盗まれたり壊されたりしないように、浮浪者が入り込まないように監視する毎日である。

浮上後のコンクリートと鉄筋の調査、鉛やアスベスト調査、修復・復元の可能性が調査され、再生プロジェクトの見積もりとともに最終報告書を待つ段階になった。ル・コルビュジエが1929年から1931年にかけて改造した鉄筋コンクリートの平底船。予想していたとは言え、修復・復元費用は高額になりそうだ。仮の見積もりではあるが、1億や2億円で済む話ではない。百年経って老朽化したコンクリート船、一般の人を収容できる船に生ま

白黒写真 ©FOUNDATION LE CORBUSIER / カラー写真 ©スターリン・エルメンドルフ

れ変わるには数億円の資金が必要だという。さらに船を維持していく資金も考慮しなければならず、文化遺産を維持することがいかに大変かを実感している。
そもそもコンクリートで船が造られたのは19世紀後半から20世紀前半にかけての数十年のことである。鉄が不足し、その代わりに安く入手できる材料としてコンクリートが使われた。簡単に安くできるのが利点だが、柔軟性と防水性に劣り、海水に弱く、硬いものや強い衝撃に耐えられない、重いのでスピードは出せないなどの理由でコンクリート船は造られなくなった。「ルイーズ・カトリーヌ号」は一世を風靡し、短いブームで終わったコンクリート造船技術を今に伝える貴重な存在である。
しかし、3年近く沈んだままの船の鉄筋は腐食し、家具や木工品、付属品は全て無くなり、水平連続窓もほとんど残っていない。備え付けの家具やベッドはル・コルビュジエ建築の大きな特徴である。今あるのは「リエージュ号」(1919年から1929年まで屋根も柱も窓もなく、石炭を運搬していた時代)の船体と付け加えられたル・コルビュジエの柱だけが残っている状態だ。直径17cm(円周55cm)の36本の柱。華奢で繊細で均整の取れた美しい柱だと思う。何度も塗り直されたペンキの層だけが90年の時間を具現化している。薄いダークブルー、パステルブルー、ブルーマリン、緑、茶色など何層もの色がある。そのペンキ層も今やどんどん剥がれ落ち、コンクリートの地肌がむき出しになる日も遠くないだろう。当時は問題にならなかった塗料の鉛、柱の内部に使われたアスベスト・ファイバーだが、今日の安全規格をクリアするための費用は高額に上る。1000平方メートルのコンクリートを修理、補強しなければならない。資金面だけで言えば修復するより新たに造り直す方が安いことになる。資金と修復を天秤にかけながら、どのようにプロジェクトを進めるか難しい選択に迫られるだろう。コロナ禍の都市封鎖が続く中、川に沿って船まで歩く道すがらに船の運命を思う。以上

右は完成イメージ
写真はいずれも公益財団法人国際文化会館のホームページから小原靖夫が転写しました。